



彩りの参道

赤倉神社

七尾市街地から田鶴浜方面へ車を走らせる。のと鉄道の電車で伴走されるように国道を進んでいくと、三引口のバス停のあたりで「全国名水百選 御手洗池 赤蔵山」の看板が右手に見えてくる。看板の案内どおりに行くと、のどかな田園風景が広がり、しばらくして前方に大きな石の鳥居が現れる。その両側には、黄色の葉を付けた銀杏の木と鮮やかに紅い葉を付けたモミジの木が並んでいる。神仏習合の霊山といわれた赤蔵山の登り口である。

石の鳥居は赤蔵山に鎮座する赤倉神社のものである。大山津見神を祭神とし、かつての赤蔵山上一本宮寺

の講堂を拝殿とする。神社に伝わる「能州赤蔵山縁起」によると、天平2年(730)聖武天皇の皇太子が眼病にかかった際に、中納言藤原諸末に命じ、この地で祈願を行ったところ、眼病が治った。それにより神殿を建設し、後白河天皇の時に神殿を再建、それを赤蔵山上一本宮寺としたことが始まりといわれている。その後、長い時を経て、天正8年(1580)に長連龍が再興し、家督を継いだ連頼が、仁王門・拝殿・奥の院などを再建した。

2つの参道

赤蔵山には、表参道と裏参道がある。石の鳥居から入る道が表参道、

怡岩院と栄春院の前を通って、入る道が裏参道である。怡岩院は長連龍の父の菩提寺、栄春院は同じく母の菩提寺であり、焼失と再建を経て、



栄春院の境内

現在に至っている。

裏参道に足を踏み入れると、ピンと張りつめた空気が漂っているように感じる。シダの葉がそっと顔を出すように生える石段を登っていくと、表参道と合流し、右手の奥には拝殿が見える。ちょうど、夫婦らしき男女が、参拝していた。

さらに上へと石段は続く。まるでピロイドを敷いたように瑞々しく、艶やかな深緑の苔の石段である。あたりを見渡すと、杉やアテの巨木が立ち並び、鬱蒼としていて。その足下には、貼りつくように生えた苔が木洩れ日に照らされ、美しく光っている。少しづつ上へと目を移していくと、空に届いているように感じるくらい高い木だということに気付いた。